感染症と妊産婦死亡実例についての検討

鮫島　浩

調査対象230症例中、検討可能症例は197例であり、その内、感染症が主な死因と判定された症例は10例で、全体の5.08％（10／197）を占めた。内訳は、敗血症性ショックが5例、肺炎・気管支炎が3例、残りの2例はVAHS（virus associated hemophagocytic syndrome）であった。

1　発症年齢

20才代4例、30才代5例、40才代1例であった。

2　経産回数

初産婦1例、1回経産婦8例、2回経産婦1例であった。

3　既往歴

肺炎・気管支炎の3例中1例に、妊娠前からの喘息様呼吸困難の既往を認めた。その他の症例で明らかな既往歴を持つ症例はなかった。

4　発症時期

産褥期が1例で、残りの9例は妊娠中（妊娠12週が1例、妊娠27週から36週までが5例、妊娠37週から40週が3例）であった。

5　初発症状

38℃以上の発熱が6例、風邪様症状が6例で最も多かった（重複あり）。続いて、呼吸困難、チアノーゼが3例、下痢を伴っていた症例が2例あった。VAHSの1例は重症妊娠悪阻に引き続いて発症したと考えられた。

6　発症～死亡までの時間

24時間未満が7例、残りの3例は1週間以上であった。

1週間以上経過した3例中2例はVAHSであり、慢性的経過をとり徐々に悪化した。残りの1例は発症当日に呼吸停止、心拍停止となった後、蘇生されたが徐々に悪化し7日目に死亡した。

VAHS以外の肺炎・気管支炎と敗血症性ショックは非常に急性の経過をとった。

7　発症～死亡までの経過

自宅で呼吸心拍停止を起こした症例が2例、入院後、より高次の病院に搬送しなかった症例が5例、搬送症例が3例であった。搬送症例の3例は、発症後12時間以内に搬送されたが、この内2例は病院到着時にDOAの状態であった。

8　検査所見

自宅での呼吸心拍停止症例を除く8例中6例は、発症早期に凝固系の検査が施行され、その内4例に凝固異常（血小板減少＜10万、フィブリノーゲン低下、出血時間延長など）が認められた。このように、半数以上に発症早期からDIC傾向が認められた。

9　解剖

4例に剖検が行われた。2例はVAHSの症例であり、剖検により始めて診断可能であった。残りの2例は自宅での呼吸心拍停止症例と、搬入時のDOA症例であった。

10　児の予後

産褥期発症の1例を除き、妊娠中に発症した9例を検討した結果、生児を得た症例は1例のみであった。発症早期に胎動減少を訴えた症例も2例に認めた。

11　培養結果

5例の敗血症の中で自宅発症の1例を除いた4例を検討すると、3例に病原菌が同定された。それぞれA群溶連菌、化膿連鎖球菌、カンジダ真菌であった。

12　救命の可能性

救命の可能性の集計表をもとに、不可能と判定した委員が0で、かつ、ある程度救命可能の判定した委員が総数の70％以上を救命可能とすると、この10例中、救命可能症例は2例（症例166、症例205）であった。症例166は個人病院と総合病院との搬送体制に問題があり、その体制がうまく運用されれば救命の可能性もあったと推測された症例である。症例205は搬送先病院の初期治療に改善の余地ありと判断された症例である。

考　案

感染症が原因と考えられる母体死亡が、妊産婦死亡の約5％を占めた。年齢、経産回数、既往歴には特記すべき事項を認めなかった。

発症時期は妊娠初期から産褥期にかけて、幅広い時期に渡っていた。初期症状としても、38℃以上の発熱や風邪様症状が主であり、特徴的な臨床症状に欠けているように思われた。しかし、いわゆるVAHSを除き、その症状の経過は急性から激症であり、24時間以内に死亡あるいは呼吸心拍停止に至った。この急性経過中に搬送された症例でも、ほとんどは高次病院到着時にはDOAであった。検査所見としても、炎症所見以外には、血液凝固異常を伴う症例が約50％であり、その他に特徴的なものを見い出すことは出来なかった。

児の予後も悪く、妊娠中発症した9例中、生児を得ることができた症例はわずかに1例のみであった。

菌が同定された3症例は、A群溶血性連鎖球菌と化膿性連鎖球菌とカンジダ真菌であったが、いずれも母児ともに急激な経過で悪化し、救命することが出来なかった。このような症例に対しては、多くの症例の蓄積に基づき、その病因、疫学、予防対策を早急に検討する必要がある。

VAHSも未だ病因が究明されていない症候群であり、主に内科領域で問題となっていた疾患である。今回の検討から妊産婦死亡との関連が明らかと成りつつある。今後、周産期領域でも症例を蓄積し、その病因、疫学、予防対策を早急に検討し、広く一般臨床医へのフィードバックが必要である。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

調査対象 230 症例中、検討可能症例は 197 例であり、その内、感染症が主な死因と判定された症例は 10 例で、全体の 5.08%(10/197)を占めた。内訳は、敗血症性ショックが 5 例、肺炎・気管支炎が 3 例、残りの 2 例は VAHS (virus associated hemophagocytic syndrome) であった。